

松屋外集

卷二

86

八子外集

15
1400
3



5
1400
3

松屋外集卷之二

○第一紫微三台考

○三公

○太政大臣

○左右大臣

○内大臣

○公字の義

○三孤

○九卿

○三槐

○内朝

○外朝

○九棘

○槐門

○任槐

○丞相

三十四年正月十六日
高田早苗



○左右丞相 ○萬石 ○二千石

○三司 ○儀同三司 ○內陳 ○吏部侍郎

○式部 ○侍中 ○大內裏 ○紫微宮

○清涼殿 ○殿上 ○藏人

○天象地球 ○風 ○海潮 ○地震

○津波 ○度數 ○里數 ○九層天

○常靜天 ○十一天 ○三十三天

○南極北極 ○日月旋行 ○赤道黃道

○五帶 ○夜人國 ○冰海

○春分秋分 ○夏至冬至 ○天の蒼色

○六大洲 ○四大海 ○晝夜

○紫微垣 ○大微垣 ○天市垣

○四維廿八宿 ○北辰 ○帝星

○太子庶子後宮星 ○三公星三台星

○宸居号紫微

○第二神社字古曾と云

○古佐 ○たさみく ○杜

○第三えびいづみ

○第四中雀門

○柵門 ○樹塞門 ○累愚

○第五猿の剣術

○陰流

○新陰流

○撃劍

松屋外集卷之二

華頂殿亞老平小山田與清著

平八戸藩士源牟田部寛徳校

第一紫微三台考

職原抄云三公者象天之三台星也。三槐者周世外朝植三槐三公班列其下槐者懷也懷遠人之義也云云。○與清按三公は大政大臣左大臣右大臣を

いす稱ナリなり。内大臣を加スると四公なれば、大政大臣
 内大臣の中一ハを關カざれば、名義ナより乖ヒより。北畠准
 后親房卿の説ナリなり。職原抄然カきど内大臣藤原卿な
 る書キ、万葉集内大臣は、もと卿ナリなれど、三公の列小
 せ、後の定ダなり。公ノ字の義ハ、通ス也。尔雅疏、白常通、玉篇、平
 也。淮南子、注、礼記、正也、廣雅、官也、周礼、吏職也、同、平分
 也。說文、無私也、礼、注、公正無私之意也、尔雅疏、白常通、春秋元命苞、

不シ私シ也。史記、用力曰公、漢書、謂大勲也、後漢、居其官曰公、
周礼、立制及象曰公、法、背私曰公、典、知ルべし。此ハ漢土ノ例ニ據キるなり。黄
 帝の時三台の官あり。上台ハ風后、中台ハ后土、下
 台ハ五聖ナリなり。傳子天の三台星ノ象トなるなり。唐堯
 三公六卿を立テ。路史、後記虞舜三公四輔を設ケ。礼記、通典、文獻通考、
路史、後記夏禹三公六卿を置キ。通典、通考、或云、三公九卿、後記

殷の制も、これに據りて、三太を置或云三公通典周の成王既、殷の命と黜淮夷を滅し、鄧子還了、太師太傅太保の三公を立、太師ハ師法となり、了訓導、太傅ハ傳相となりて徳義を行き、太保ハ其身体を保安に、共、王字佐道を論、國事を経緯し、陰陽を和理し、有徳の人れれば、則全闕了任カキの故、則、闕の官といふ、實、百寮の率

萬民の表なり、又少師少傅少保の三孤を置、三公ハ副と次、三少ともいふ、孤特也、公卿の間、在了、特立せる官なれ也、漢書賈誼傳、昔者成王保、周公為太傅、太公為太師、保、其身體、傳、之、徳、義、師、導、之、教、訓、此、三、公、之、職、也、於是、為、置、三、少、皆、上、大夫、也、曰、少、保、少、傅、少、師、是、与、太、子、宴、者、也、故、迺、孩、提、有、識、三、公、三、少、固、明、孝、仁、礼、義、以、道、習、之、逐、去、邪、人、不、使、見、惡、行、云、注、師、古、曰、保、安、也、傳、輔、也、道、讀、曰、導、云、師、古、曰、宴、謂、安、居、云、師、古、曰、孩、小、兒、也、提、謂、提、撕、也、又冢宰司徒宗伯司馬司寇司空六

卿を置三孤と合せ九卿と稱公羊傳尚書注疏周禮注疏禮記疏六典通典執文類聚通考事物紀原小學紺珠史記平津侯主父傳續管窺輯要路門内内朝あり外朝あり外朝の左小九本此棘あり孤卿大夫之位群士之乃後居右之又九本此棘あり公侯伯子男あり位群吏其後は居面小三本の槐あり三公之位州長衆庶其後居棘之和名核下太棗下赤心下外之刺あり

る象カク槐カク和名工二ス字音懷通カク来人を懷象カク周禮注疏後三公を槐門カクとを任カク槐カク此義カク古微書取春秋元命苞小人君樹棘槐聽訟于其下棘赤心有刺言治人情者原其心不失赤實棘所以刺人令其情各歸實槐之言歸也情見歸實也之言歸或說小司馬司徒司空を三公之外傳秦趙之相國左右丞相あり史西漢の丞相公孫弘之上書致位三公之み之史秦

漢乃間相國左右丞相を三公と稱くいひ察シぶレ。

通典哀帝の代師傳を三公とす。大司馬大司徒大

司空の三公其下にあり。王莽が時四輔三公を置

後漢太傅字上公とす。太尉司徒司空字三公とす。

漢の制三公を萬石と号す。萬石君石奮とす。父子兄弟

別になり。刺史及諸侯相を二千石と号す。共に其秩

禄をよりたるを少し。漢書に孝宣帝稱す。與我共治者其

良二千石乎とありと。史記張耳

陳餘傳にみえく郡守を二千

石といふは秦代の称号なり。魏晉宋齊陳後魏

北齊後周乃代或を置或を廢す。隋に至り三師三公

あり。唐の制もこのとなり。曰循る。隋書。舊唐書。新唐

朝。孝徳天皇元年以阿部内麻呂臣を為す左大臣蘇我

倉山田石川麻呂臣を為す右大臣以大錦冠授中臣鎌

子連を為す内臣也。紀。大化五年二月置八省百官也。天

智天皇八年十月遣東宮太皇弟也。天武於藤原内大臣

鎌子家授大織冠與大臣位天智紀同十年正月以大友
 皇子拜太政大臣以蘇我志兄臣為左大臣以中臣
 金連為右大臣同上たゞのふ記したるを按ふ孝
 徳元年阿部内麻呂蘇我石川麻呂中臣鎌子を左
 右大臣内臣とせしめしと三公は濫觴とす天智十
 年大友皇子蘇我志兄中臣金連太政大臣左右大
 臣とせしめしを全備の時と云べしおもに隋唐の制

よ據て斟酌せしむるをくわし又三公字三司とい
 ふる一條院の寛弘二年二月前太宰權帥藤伊周
 列大臣座下大納言上座号儀同三司榮花物語扶
紀略卧雲日件録職原抄追加桑畧記日本の稱儀同
 三司は名目も漢官のまねびたるふく後漢書鄧
 騭傳小延平元年拜騭車騎將軍儀同三司始自騭
 也とあるを其所とす

又云。吏部侍郎職侍中著緋初出紫微宮云云。是六位藏人為式部丞而叙爵時事也云云。○與清按。此文は職原抄式部丞の条に注して、後人の志。ふや、倭漢朗詠慶賀部小吏部侍郎職侍中著緋初出紫微宮讚在衡。正通私註。賀于式部少輔補五位藏人之詩也。唐官曰吏部式部也。侍郎少輔也。侍中藏人也。著緋者六位者青色。五位著緋色。紫微者

北辰之所居也。譬帝居也。按小卧雲日件録。桓武初都于當國而構大内裡。然全篇則在嵯峨天皇代云々。大内裡の事山城名勝志。大内裡考證。古書やを引ていひたり。よこあやう。藤原在衡。式部權少輔。少五位藏人。小補志なるを賀する詩也。在衡ハ延長二年。從五位下。同六年式部權少輔。同年五位藏人。少。既小五位して淺緋袍著人なれ。其袍のよ初紫微宮不出たる。紫微宮ハ天子燕息の處。清涼

殿

類聚國史小清涼殿、長秋記小西涼殿、榮花物語ニセイラウテン、又セイリヤウテン、

延文百首、後光嚴院御製小多き、きよく、涼一は住居

抄中殿御路寢、本殿、御殿、山抄、江次第拾芥抄、中殿、抄、

會部類記、路寢、文粹、後寢、政事、新儀式、西宮記、北山

御殿朝餉、此中、殿上、抄、江次第、左經記、

侍、古今集、侍中群要小上侍、小右記、雲上、中、臺盤

所、西宮記、北山抄、古今集、女房侍、侍中群要、内侍所、實方、家集、女房此候

所也、もあま属ヲキたう、禁腋秘抄ニ、殿上ハ御殿ノ孫庇

ヲノゾキテ、西ハ四間ノ通障子ノトホリニ、ハシ

ヲバ六間ニワリテ、柱ヲ立タリ、上ノ戸ノ妻戸ノ

内ハ一椽、ソバニ小節アリ、一間ノ奥ニ壁ニソヘテ

御倚子ヲタツ、此御倚子ハ昔ノマ、ニテ今迄ア

リ、關白御倚子ノ傍ニ著座スル也、其前ノエシハ

小板敷トイヒテ、紫緑ノ疊ヲ敷職事此所ニ候フ、

頭候トウサツラフヲリハ、五位ハウルハシクハ居キズ、片沓カタダハ
キナカラ片膝カタヒヲノホセタリ。此座ニ著ツキ又棹間ササノヲ
執シスル人モアリ、小板敷ノ上、三間ニ柱ヲ立テ、西
ノ間ノ中ニ、又小チホキ柱ヲ立、横サマニ木ヲ渡シテ、棹ノ
臺ト云テ、御倚子ノ覆オホヒトリテ懸カクル也。覆ハ蘇芳スヘノ
繪エヲ練ネタル、差サシ延ノビヲ敷シキ満ミテオク、端ハシニ疊タガヲ敷シキ奥ウラ端
各一帖両面也、末、横サマニ又赤縁敷アカベリ中ニ臺盤ダイバンヲ

立タテ後ノ方ハ切キ臺盤ダイバンツギハ尺二脚也、其末ニ火櫃ヒツツ
ニ置ツ夏ハ火櫃ヲ取テ、井キダンキノ盤ヲ置、奥ノ
疊ノ奥方ニ籍フダヲ立タテ殿上人ノ名ヲ三段ニ誌ヒタリ、
上ハ四位中ナカハ五位下ハ非蔵人也、名ノ下シタニ紙ヲ
押オシテ上日付ウヘツキク、放紙ハナシト云、夜ハ帟フタニ入イ晝ヒルハ帟フタヲタ
タミテ、机ノ下ニオク、其次ニ日記ノ唐櫃タウキヲ立ツ
ハノ柱ニ配膳ハイゼンノ番ヲ書カキテ押オシタリ、四番ニ折ヲル、末

二脇戸アリ、下ノ戸ト云フ。傍ノ壁ヲ小壁ト云。追
 儼ノ殿上人、此壁ニ押也。末ノ柱ヨリ、校書殿ノ後
 二、繩ヲ張テ鈴ヲ付、鈴ノ繩ト云。蔵人小舎人ヲ召
 時鳴ラスとみえ、蔵人頭五位蔵人非蔵人六位蔵人
 也。職原抄は六位蔵人の外に非蔵人として擧げられ
 たるを非蔵人の者れ事にて、禁秘抄、禁掖秘抄、小
 一、非蔵人殿上の小板敷は候はる也。然るハ吏
 部侍郎ハ式部少輔の唐名なるを、式部丞とおし

ひまが、五位を誤とるがごと、北畠准后の云々や
 小あらし、さくも式部少輔為蔵人時之事也とあ
 るづ記なるを、叙爵は既に在衡ハ五位なれど、のそ
 書ても、今始て五位とるよりなれとて誤也や、
 了紫微宮三台星字解人小々先天象字察一、天
 象を志らん小ハ地球字知一、抑天地の形雞子の
 小とく、地を天の中小静居志る黄丸なり、天は外

小運轉周旋^{ソウコン}青水也^{シヨクスイ}土地も海水も一大丸^{ヒトマカセ}もつて、
 大空中^{オホソラ}に静居^{シヨクイ}はせれば四方四隅^{シヨウシヨク}上下^{ジョウゲ}の別^{ワケ}なく、
 地居乗船^{チイノネフネ}の人^{ヒト}は戴^{イタ}く所^{トコロ}悉^{シツ}く天^{アメ}なるも、踏^{フム}所^{トコロ}悉^{シツ}く
 地^チなるも、井池^{イヂ}を掘^ホむとバ、其^{ソノ}堀^{ホリ}四^シめらるる所^{トコロ}忽^チ天^{アメ}と變^ハ
 了^マ、其^{ソノ}土^{ツチ}を堆^{オビ}たる所^{トコロ}忽^チ地^チと變^ハちり、人^{ヒト}平地^{ヘイヂ}を行^{ユク}て、
 數^{スウ}万里^{マンリ}を經^{ケル}とバ、由^ユらぬまなく圓^{マダマ}形^{ガタ}に隨^ツて下^シ向^{カウ}す、
 船^{フネ}波^ハ濤^ウを行^{ユク}て數^{スウ}万里^{マンリ}を過^スとバ、おもむかへざる圓^{マダマ}形^{ガタ}

して隨^ツて下^シ向^{カウ}はると、各^{オノオノ}の已^マに下^シ向^{カウ}たるは志^シ
 らざるなり、然^{シカ}て何^ニ故^ニに地^チ海^{カイ}一^ニ丸^トなる、大^{オホ}空中^{ソウ}に
 静^{シヨク}處^{トコロ}といふ、佛^{ブツ}の四^シ風^{フウ}輪^{リン}住^{ヂュウ}持^ヂをといふに似^ニた
 ること少^{オウ}く、天^{アメ}の氣^キの集^ツ成^{セイ}せるなれど、其^{ソノ}氣^キ能^ク地^チ球^{キウ}
 を中^{ナカ}に保^ホち、萬^{マン}物^{ブツ}を以^テて地^チ球^{キウ}を離^リるるも、水^{ミヅ}乃^チ
 性^{セイ}下^カる、金^{キン}石^{シヨク}の性^{セイ}沈^{シヅ}む、天^{アメ}の氣^キを押^{オシ}壓^{アツ}せらるるなり、
 塵^{チリ}埃^{アヒ}の風^{フウ}を揚^{オホ}り、烟^{エン}火^カの上^{ウヘ}をよみ、立^{タチ}昇^{ノボ}るる、地^チ球^{キウ}

中の風氣のこぼりて天の所為はありげ大塊の
 噫氣といつふても風ハ天物ならぬ字知づ。平
 城主源熙朝臣の談も文政十一年秋西國四國
 九國の間大風高潮荒たるを平戸の沖字申く
 舟頻に艘て動ざまバ船人驚くみる小洲上はあ
 了此處ハ小東洋中小てかす洲島など常はみえ
 せなかりしはのちもゆゑをいふべ波浪の音
 したるえねむ四方をみえたりし都て潮干て船
 た洲中は艘たもいふもせむと佛神をわいど
 出潮浪系のおとくたさるるかきくあつた舟あ
 ましかりしといふさうと云く按て地球を山海一

大丸ふて九天の真中よかす増減なり静物を色
 ど地氣激動して或も風雷雨電或ハ地震大風乃
 變ある也西國四國九國の間高潮打寄たりし彼
 増減なり潮を吹拂去たり必地心あり
 らもるをよこすなり熙朝臣又云文政十二
 年の春越後國大地震して山川崩埋し家宅没倒
 一人畜壓殺さるる幾千を数えたりしその
 を正しくいふも地震横小振るるあり
 べ上小きてあげたをいふも艦鼠の土字うご
 きてあつたをいふも五六尺或も九尺一丈もあ
 がつたをいふも地裂山崩家埋も也と云く
 按てこれらも地震横小をいふも地震横小をいふも
 いふ所の所り残づるありぬり或も十里廿里三四
 十里外に及ぶぬり地球中ハ伏氣揺蕩せしもの

八四層高天也。第五層ハ火星天ホウセイテン。火星の廻マヒ
 る天也。第六層ハ木星天ムジウテン。木星の廻マヒる天也。第
 七層ハ土星天ツセイテン。土星の廻マヒる天也。第八層ハ列
 宿恒星天リョクシュクコウセイテン。列宿恒星の旋マヒる天也。第九層ハ宗
 動天也。宗ハ主也。宗室の宗ムネハ字義ジギハお外ソト也。此天
 外層ソトノヘ也。以内ハ八層天ハチノヘノテン。みれミれレ字ジ主宗ムネノミヤと。相
 共ト東ヒガシより昇ノボりて西ニシへ下シり。又然シテ去リて旋動マヒる也。

宗動天ムネノミヤノテンともいふ也。此宗動天の外郭ソトノカサハ常静天ジョウジヤウテンと
 して、雞子ニキゴ乃殼カラれどよく動ウツる天テンあり。或説ハ十一
 天テンあり。佛説ハ三三天サンサンテンともいふ。共トふレけレど
 一ヒトかク天テンを東ヒガシより西ニシへ左旋ヒダリマヒして、間断マキエなれど、
 南北極ナンポクの二端ニヘあり。宗動天の枢紐スヅメとなす。少シく
 揺動ユウドウなり。然シテハ常静天ジョウジヤウテン最外ソトノヘハ静居シヤウキョとて、雞子ニキゴ殼カラ
 のごとく、其内ソノウチハ南北の二極ニキョクハ枢静居スヅメシヤウキョとて、宗動以ムネノミヤニ

内の九天を、左一旋マシハ、車軸ハ不動マシして、車輪
 を旋マシハ、九天の最内イナ乃月天の旋動中マシ、
 地海ウミの圓形マシ靜然マシと保マシして懸マシる居マシる也、志マシの志マシ也、
 天地の間マシ不動マシ物ハ、最外イナ層の常靜天と、南極北
 極乃二マシ扼マシと地海ウミ球マシとなマシり、月を月天マシ字マシ旋マシる地球
 小近マシ一、日マシを日天マシ字マシ旋マシる地球マシは遠マシ一、水金の二星
 天マシ、月、上日、下の天也、火木土星及恒星の四天マシ、

日マシ上宗動マシ下の天也、此等の天マシハ日月星辰東マシより
 出マシる西マシ没マシ地下マシ字マシ旋マシる、又東出西没マシ字マシハ、天を
 左マシ旋マシハといマシ也、日輪春秋の二分マシ小旋マシる道マシ字マシ志道マシ
 といマシ、これ南北マシ平マシ分の最中マシなり、志道マシより南極小
 至マシる九十度、北極小至マシる九十度也、南北極の間マシ凡
 了百八十度、日本道六千九百廿里餘也、此志道マシの
 南北各廿三度半餘隔マシる黄道あり、南黄道ハ冬至マシ

小日輪旋行の線北黄道ハ夏至ヨ日輪旋行の線也南北の黄道ハ間四十七度餘の處ニ煖帶といひて其下の國土ニ炎熱甚ク煖帶ニ正中ありて其南北小各ニ帶寒帶ありて共ニ五帶あり日本唐土天竺阿蘭陀ハ此北ニ帶の下なる國土あり南北ニ帶の間ハ時候平和ありて土地豊饒也南北寒帶ハ南北極の下ニ在りて日光ニ遠ク大

寒冷不毛の地也半歳ニ在りて晝ニ一、半歳ニ在りて夜ニ一、夜人國氷海ハ此間ニありて赤道下ハ晝夜等分其外ハ漸ク晝夜長短ありて寒帶ニ至るとかく氣候偏勝小なる也南北極を天頂ニ一、赤道を天腰と云ふ也人体小たして北極を首と云ふ南極ニ是と云ふより也北極の下ニ春分此後ハ皆晝秋分の後ニ皆夜也南極の下ニ秋分

後ハ皆晝。春分後ハ皆夜也。かく一年たゞ一晝夜
 小分る、よりハ日月横旋して、極星の常ニ頭頂
 小みゆき也。天の蒼色ハ實ハ闇黒に似、日光の
 照映ヲ受テ蒼也。然テ地球中ニ六大洲、四大海
 あり、亞細亞大洲ハ日本、漢土、天竺、安南、呂宋、占城
 朝鮮、女直、韃靼、など此中ニ在り、歐羅巴大洲
 ハ其西小續、阿蘭陀ハ此中の一小國也。利未

亞大洲ハ歐羅巴、南小續、亞細亞乃西南方な
 り、赤道以南小續、北正帶、南正帶、小沙
 地也。亞細亞、小東洋ヲ隔テ、東ニ北亞墨
 利加大洲あり、以上四大洲ハ皆赤道以北小あり、
 北亞墨利加大洲、南小續、南亞墨利加大洲
 あり、是ハ赤道の下ニ在り、南小續、南亞墨利加大洲
 煖帶、南正帶、小沙地也。此五大洲の南ニ海ニ

隔て墨瓦臘泥加大洲あり、廣大の悉地ふして、南、
 正帯、南寒帯、よ渉り、小東洋より出たることあり、
 又、煖帯の半赤道の真下ふあり、又、煖帯の地ふ
 れば、南北極共小間遠くあり、又、之、高山の頂ふ
 登り、ハ、兩極の星、地下ふ著り、又、日輪を、寅時よ
 亞墨利加大東洋より出申時よ小東洋、日本の上より
 来る、其間百八十度あり、唐法四万五千里也、
日本道七

千二百里許也、丑時よ大西洋以西把尼亞の福島に至る
 其間、百八十度也、合せり九萬里、
日本道一萬四千四百里
 許を、一晝夜十二時よ周旋終る也、然り、ハ、亞墨利
 加大東洋と、以亞把尼亞の福島ハ、東西の首尾附
 合て圓象を成所也、利未亞歐邏巴の西海ハ、大西
 洋也、亞細亞の南海ハ、小西洋也、亞細亞々墨利加
 の間、海を、小東洋也、日本、蝦夷、琉球、呂宋、など、此

小東洋中の島也。亞墨利加の東海ハ大東洋也。此を四大海といふ。北寒帶下ハ氷海あり。南寒帶下ハ墨瓦臘尼加大洲の悉地あり。海はあらび。日輪のく十二時の間東西に地球を旋る。其照處六時を晝其陰ろふ處六時ハ夜となり。東方の卯時ハ西方の酉時。西方の夜半ハ東方の日中也。南北極の間ハ百八十度。地下を旋るも百八十度。

合せり三百六十度の圓形也。抑北極ハ天地の頭首不動樞處寒帶地の心頂にあり。此常靜北極の天字去ハと三十六度以下ハ周圍の徑七十二度乃處と紫微垣といふ。其垣内に紫微宮あり。翼軫の間ハ當り十餘星列座せる處ハ太微垣なり。房心の間ハ當り廿餘星列座せる處ハ天市垣なり。一垣ハ一構の義なり。羣星の見し一構の中な

斗也。四維とて、廿八宿其外に遠る。東ハ角亢氏房心尾箕の七星也。南ハ斗牛女虚危室壁の七星也。西ハ奎婁胃卯畢觜參の七星也。北ハ井鬼柳星張翼軫の七星也。三垣の中、紫微ハ心中の一垣也。太微ハ北方の翼軫に近く、天市ハ東方の房心に近く、此二垣も片依たる星垣也。然る紫微も中垣も宮寢位也。天子燕息の處、これ大内ふた

りふ。太微も上垣も朝廷位なり。天子聴政の處ふたふ。天市ハ下垣も明堂位也。天子行幸の畿内ふたふ。されど紫微宮寢も、天子息て朝夕住む。太微朝廷も、天子臨て政を聴ぬ。天市明堂も、天子行幸して省察しぬ。紫微垣中を紫微宮とも、紫宮とも、中宮ともいふ。春秋元命苞古微書卷七收之。ふ。太微為天庭五帝以合時。紫微宮為

大帝中有五帝座。五帝合明。天生大列。為中宮天極星。其一明者。太一常居也。傍兩星。巨辰子位。故為北辰。以起節度。亦為紫微宮。宋均以為十二宮中外。位各定。總謂之紫宮也。紫之言此也。宮之言中也。言天神圖法。陰陽開閉。皆在此中也。又宮之言宣也。宣氣立精。為神垣也。云云。孫鼓按。淮南子。太微者。太一之庭也。紫宮者。太一之居也。云云。春秋演孔圖。古微書卷八。收之。小紫極宮內。諸侯為

外蕃。三公為中輔。云云。此紫宮の中。小北極。五星あり。一名ハ北辰。一名ハ天極といふ。五星の第一ハ太子也。第二の最大なるハ帝也。第三ハ庶子也。餘ハ二星。ハ後宮の属也。北極不動。故小北辰居其所。而衆星共之。やふり。やれど不動。ふらあり。以微動。やふり。ハ人。ハ分別也。三師の三星。三公ハ三星。四輔の四星。やふり。紫微垣。中。小あり。太微垣。小。五帝の

座及三公六三星三台の六星九卿の三星外あり
天市垣小も帝座及諸侯の星あり三垣の外も四
維の廿八宿あり皆紫微宮を仰て隨從せし象也
南極も北極も不動の處少く宮垣四
維の諸星あきと倭漢共小赤道以北正帶下れ國
ふて常も南極を窺ふとあり故も北極の星
象を考察して説を立たるものなり太微垣の三

台八台各上下二星ありて共も六星之史記天官
書小魁下六星兩々相比者名曰三能三能色齊君
臣和不齊為乖戾云云注も蘇林曰音三台索隱曰
漢書東方朔願陳泰階六符孟康曰泰階三台也台
星凡六星六符六星之符驗也應劭引黃帝泰階六
符經曰泰階者天子之三階上階上星為男主下星
為女主中階上星為諸侯三公下星為卿大夫下階

上星為士下星為庶人三階平則陰陽和風雨時不平則稼穡不成冬雷夏霜天行暴令好興甲兵修宮榭廣苑囿則上階為之圻也云云漢書天文志云魁下六星兩々而此者曰三能三能色參君臣和不參為乖戾云云晉書天文志云三台六星兩々而居起文昌列抵太微一曰天柱三公之位也在人曰三公在天曰三台主開德宣符也西近文昌二星曰上台

為司命主壽次二星曰中台為司中主宗室東二星曰下台為司祿主兵所以昭德塞違也又曰三台為天階太一躡以上下一曰泰階上階上星為天子下星為女主中階上星為諸侯三公下星為卿大夫下階上星為士下星為庶人所以和陰陽而理萬物也云云隋書天文志說亦同春秋漢含孳古微書卷十二收之小三公在天為三台云云宋書天文志云三台為三公云云

三台為三司云云貞觀政要論君道注云三公上應
三台台司者三公之位也云云又云又紫微垣
杓東の三星と魁第一星上の三星三師といふ
三公の象也史記天官書中宮天極星其一明者
太一之常居也後勾四星末大星正妃餘三星後宮
之屬也旁三星三公子屬環之匡衛十二星藩臣皆
曰紫宮云云注云正義曰三公三星在北斗杓東又

三公三星在北斗魁西並為太尉司徒司空之象主
變理陰陽主佐機務云云漢書天文志亦同此文晉
書天文志杓南三星及魁第一星西三星皆曰三
公主宣德化調七政和陰陽之官也云云隋書天文
清人吳肅公の天官考異漢史天文志諸名數有
不同於後世者云云天極即北辰也傍三星三公按三公
星在北斗杓東又三公一在北斗魁西若天極傍者

非三公也云云、なほあるふく知べし。又大微垣の謂
者の東北の三星字も、三公内坐といふ、それを三公
星、紫微垣小二處、太微垣小二處あるか、かゝりけり。
三秦記、未央宮一名紫微宮云云、唐書、太宗文德
皇后傳、妾托體紫宮尊貴已極云云、これらあり、
宸居、紫微宮紫宮などいふ例おもふべし。續日
本紀、高野天皇受禪、改皇后宮、職曰紫微中臺、置

紫微内相、よみゆ、さき九天三垣地球のゆゑより
と、神代紀、淮南子、抱朴子、物理論、續博物志、小學紺
珠、事林廣記、管窺輯要、三才圖會、通雅、天官考異、續
古文苑、西方要紀、天經或問、など字は、久諸書よ
通考せる定説あり、余の臆断、あるべし、又西洋よ
天静地動の説あれ、と、尚書考靈曜、よ、と、
又、えたるより、別ふし、あ、な、こ、ふ、ハ用、な、れ、を、

言及イヒオホヤヤノノ止止ぬぬ

第二神社子古曾と云

神社子古曾といふと、延木四時祭式下十七、攝

津國八箇社の中、下照比賣社一處、或号比賣許曾、

社云云、又廿丁紀伊國四箇社の中、伊太祁曾社一

座云云、神名式上廿丁、河内國澁川郡波牟許曾神

社云云、又廿一丁河内國丹比郡阿麻美許曾神社云

云、又廿四丁攝津國東生郡比賣許曾神社云云、又廿五

丁伊勢國三重郡小許曾神社云云、神名式下三丁、

近江國淺井郡上許曾神社云云、又四十八丁出雲國、

秋鹿郡許曾志神社云云、出雲風土記廿六丁、秋鹿

郡許曾志社云云、以上十一所並在神祇官云云、天

武紀上十三丁、社戸臣大口云云、新撰姓氏錄上八丁

攝津國皇別、許曾倍朝臣云云、圓光大師九卷傳

一ふ、美作國福岡ノ北ノ莊朽社云云、ナド許曾と
 も、祁曾キソウと云ふ詞あり、巨勢コセと云ふ地名も、カ
 して、聞由、比賣許曾ハ下照姫社シメノミヤ、姫社の義
 也、伊太祁曾ハ和名抄ワナヒカキ、紀伊國名草郡伊太祁曾
 神戸カヌヘあり、且来郷イコ、日前神戸ヒコノカヌヘ、須佐神戸スサノカヌヘ、ナド、ふオホヒ並た
 了、且来字イタコイタコ訓も、アシタコアシタコアシアシの約イ
 ナド、丁チヨウちチちチ、常陸鹿島トコノシマ、潮宮イタノミヤウシノミヤと云ふ

小祠あり、又行方郡板来郷イタコを、今ハ潮来と書々、
 こも朝来の誤アヤマなり、むと、門人北條時鄰ノノが鹿島志
 小コしシ、續日本紀シヅメニッポンキ、四シ、卷マキ、十三トウジウ、左サ、紀伊國名草郡、且
 来郷キライとあり、ナド、伊太祁曾イタキソウの伊太イタハ地名ナリ、伊
 都イ、ナド、しシ、ナド、心ココロ、ナド、近江伊香郡オホノエノイカノ、意太神
 社イタノミヤ、ナド、あり、名ナ、ナド、祁曾キソウハ社ミヤ、ナド、波牟許曾ハムコソウハ
 蛇社ヘビノミヤ、ナド、近江伊香郡波弥神社オホノエノイカノハヤミノミヤ、丹後丹波郡波弥

神社カドもみれ通音カドて蛇ヘビの義とたる由波美ハ
閑美カドとも通ひて物を取食虫トリムなればいへず及鼻の
音カドぞくおもふてうらべ阿麻美許曾ハアマヒ社カドよ
や古事記上カド天神御子之御壽者木花之阿摩比
能微坐云云神代紀下カド如木華之移落云云一云
如木華之俄遷轉云云カドある阿摩比よ通ひて
小許曾ハ小社也上許曾ハ上社カドなり許曾志ハ社

下カド下を志とのつし高倉下カド例あり社戸ハ社邊也
然カドて神社を古曾といふも尊稱の詞なりて舊本
今昔物語廿四卷十五語又古曾カドなりといふ又東國の方言よ田
地カドの日光をさカドかり樹木を古佐カドといひカドれカド拂カドと古
左刈カドといふ夫木抄秋部十四丁右カドよカドふカドぐカドもカドぎカドりカドみ
ちカドぬカドくのカドるカドぎカドよカドいカドほカドじカド秋のカド夜カドはカド月カドとカドあるカドしカド蝦夷人ハ
口カドより霧の如き物を吹出カドて空カドを暗カドくカドいカドといふ是幻術

文アリト

又海に入て後、浮キあがると潮ナやぐをいふともいふ
 了、東國より樹陰ツキこころいふ、又こころハ胡笳也ともいふ、
 蒙求の鄭公霧市ト近しと、和訓栞九の卷十 七丁右 しまみ
 ぬ、藻鹽草七乃卷夷部フこころト古座と書けり、
 是ハこころガかたえんまより、目をいふともいふ
 あさむや思ふ時、はのぶえのやうカ物ヲふく
 ば、霧のやうカ物ヲおこる、空カラくくくカ来ルなり、

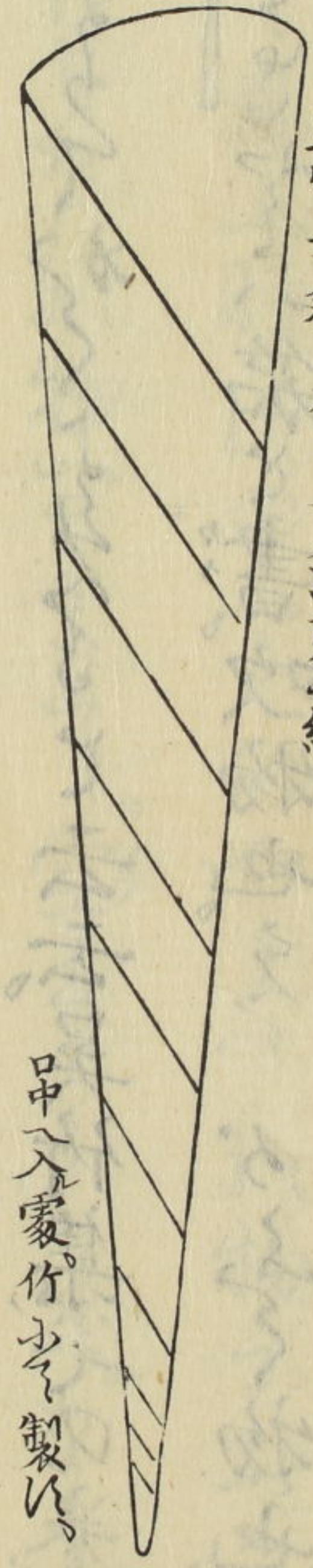
こころノようつかクよみんと云云、吳竹集七の卷
 古部コこころハ笳と書吹物也、えガふく物也、
 蝦夷の敵ヲまのまニ目をくむるのこころト思ふ
 時、はのぶえハやうカ物ヲふくカ霧ニ似る
 物降て空カラくくカ也、一説海に入て浮あ
 がる、汐ノふくバしキ霧レくニ曇
 とくコ吹カくカ云云、
 與清曰、此、
 歎夫未秋

四を出處ふて、藻汐草、七、夷部ふり引れた。為家の歌へ。最上徳内蝦夷がふくこさ笛の製作を傳へ来り。余ふもはくす。秋の夜や之をがたきふく空ておく。たてた。

の月、紹巴云云、東遊雜記五乃卷ふ。コサ笛の圖、長一尺五六寸より、二尺まであり、大小あり、中は真をぬく、異木の皮字をくると巻て、丸く製せり。

此なり。

此處寺廻り夫より下六次第細し。



吊入處竹少製し。

木の皮少く製せり、三尺計の圖れどよ笛へ、此内へたふの志をぬ石灰のぶら細粉字入きり、それ字海面は吹ちり、月の光を汐よりほらぬやうふして、其間を漁字ほら云云、たどの胡沙ふくも籠氣の義より古き古女也、佐ハ志の通音氣れ事也、氣字志といふハ時雨も氣暗也、嵐も荒氣也、虹も丹氣也、咳も息放也、ハ曇氣も籠氣といふ

ふよる陰翳の名ふをりて轉せりなり社地と杜
に樹蔭の處なれば古曾としるも籠氣の通音
也モリと云々室の通音もや古事記雄略の段御
歌小美母呂能伊都加斯賀母登とある美母呂
神社して伊都賀斯ハ齋津白檮也神社の木なれ
ど忌憚るよりふる齋津といふ

第三之びりけ

新千載集十八卷俳諧六帖題よきよき傳くる歌
ハ中よ前大納言為家

あこころく奥の那のえびまをけし
うふり引ちぢは與清白なる新撰六帖二
の条ふ出たる歌ふ上の句の事ハとて夫木
抄雜十三郡の部をとおれわづらひハとやて
聞えぬ歌也えびまをけしなまなふとあ

是物結ふ紐ヒモふトあれやラもトぐトたる懸緒カケヲよク方
 式シなリ糸ヲよク敷キ夷ハ法ノ令リなきニ國ヲなレ
 ちシ了ス又モ端ノあマりタるトりヤ俗ノ紙ノ
 端ノ斷レ餘ヲさスるハ紙トいフ也ト域外ノ夷
 小トてテ圍外ノ紙餘ヲ夷紙といふ也懸緒ノ餘
 端ある紙も夷懸といふ也夷紙ハ本草綱目卅八
 ノ卷服器部二紙ノ糸ノ糯名也藥品中有閃刀紙

乃摺紙チ之際ハ一角ヲ疊キ在紙中ニ匠人不知漏裁者醫人
 取入藥用今方中味見用此何歟とある閃刀紙ハ
 也也上カく考記シて後ふ三條家装束抄ヲなスれ
 ち上袴莊年ノ人縮線綾と稱して白た浮織物地
 は小石疊霰也其中ニ有窠ノ文中年ノ人も堅織
 物文藤丸遠居之裏紅ノ板引腰ニ有上指糸白た
 練線ノ糸ふくくよううて指之股立ニ有夷懸ノ糸

白練糸ふ冬夏四季同物也。老人を非白裏紅張裏
也。板引ふせびとある。さうら余が考允當なるの
や。

第四中雀門

武家の中雀門といふは城に有る中柵門の事也。
此は要害の門なれど御城なりて立ちたまをぬ
事なれど御連枝の御居所ハやど御城の形とす。

中柵門字立ちとす也。今ハ本据字とす失ひた
高貴の御門と称みおもひ中雀門と書て雀の止
處など附會の説字おこせらる。城中の柵門字古
代の中門とす。作て出するよう。名ハ中
柵門とす。實ハ中門也。中門廊などもいへ。平家
物語盛衰記などその外古書小所見おこす。魏志
六 袁紹傳。審配將憑禮開突門内太祖兵三百人

配覺之從城上以大石擊突中柵門柵門閉入者皆
 沒云云。あゝ中柵門ハ字面より申すも、晋書宣帝紀
 五丁小於城外為木柵以自固とあるは外柵といふ
 べし。要笮辨志二乃卷二日光御社參之節諸御門
 番御番代大名格別之筋目之衆勤番仰付之云云
 中雀御門御書院番頭與力同心云云又云御成之節
 御門建有之節御三家方御通行之節中雀御門者

片扉明御兩所様の節ハ兩扉閉候事其外ハ増上
 寺方丈之外御門開不申候云云又按小論語八伯
 篇小邦君樹塞門管氏亦樹塞門朱注ハ屏謂之樹
 塞猶蔽也設屏於門以蔽内外也云云家語曲礼子
 貢問小孔子曰管仲鏤簋而朱紘旅樹而反坫王肅
 注ハ旅施也樹屏也天子外屏諸侯内屏反坫在兩
 楹之間云云などある樹と今の中雀門の貌也と

とバ名々中柵門の義少て高貴の家子限とるよ
 一ハ邦君樹塞門の説ふおろろや天祿識餘于收
 説鈴十 累愚条子段成式云士林多稱雀網為累二
 愚其誤如此按漢書累愚屏也復也又按劉熙釋
 名曰累愚在門外累復也愚思也臣將入請事於此
 復重思之也今之照牆相似云云少もの似り似た
 るやまかり

第五様此劔術

武備志八十六卷陣練 教藝三小影流劔術乃目錄
 并其圖字出ヤリ 様の劔術此圖あり松下見林
 異稱日本傳中六卷九丁 今按小及乎且利氏之季
 有日向守愛洲移香磨霜刀年久詰鶉戸権現祈業
 精夢神顯様形示奥秘名著于世名家曰陰流其徒
 上泉武蔵守藤原信綱用心損益之号新陰流有様

飛猿回山影月影浮船浦波覽行松風花車長短徹
 底礮波等手法云云倭漢三才圖會廿卷二丁兵器
 類部說亦同與清按小吳越春秋五卷丁右勾踐陰
 謀外傳小范蠡對曰云云今聞越有處女出於南林
 國人稱善願王請之立可見越王乃使使聘之問以
 劍戟之術處女將北見於王道逢一翁自稱曰素公
 問於處女吾聞女善劍願得一見之女曰妾不敢有

所隱也惟公試之於是素公即挽林杪之竹似棹末
 折墮地女即捷其末素公操其本而刺處女女因舉
 杖擊之素公即飛上樹化為白猿云云此說事文類
 聚後集廿七卷小載以能改齋漫錄一卷授圖黃
 石老學劍白猿翁の条小潘子真詩話云杜牧之題
 李西平宅云授圖黃石老學劍白猿翁庾信作宇文
 盛墓誌所謂授圖黃石不無師表學劍白猿遂傳風

昔然予讀李太白贈宋中丞待云白猿慙劍術黃石
 借兵符則太白亦嘗用之矣云云李白詩集補註四
 卷^{廿八}結客少年場行少年學劍術凌轢白猿公
 注小齊賢曰越有處女能劍術越王聘之處女將北
 見王道逢老翁自稱袁公曰吾聞子善劍術願一觀
 之處女曰惟公試之袁公即跳於竹林槁折墮地處
 女接末袁公採本刺處女女應節入三入因舉杖擊

之袁公飛上樹化白猿而去云云能改齋漫錄引
 李白白猿慙劍術の句は李白詩補注十一卷^{七丁}
 小み由此白猿公の故事よりて愛洲移香其
 術の名目字没出ししや愛洲移香本朝武藝小
 傳六卷^{一丁}左小は愛洲惟孝^{キカウ}の作し上泉武蔵守
 藤原信綱と同書^{六卷一}小伊勢守の作し諱字
 欠しを劍術系圖けおちし愛洲陰流新陰

流神陰流リウ、シニ、カゲ、リウ、シニ、カゲ、リウ心陰流シニ、カゲ、リウなり。化カ了リて、其術の名目ナメに書法
 一様イツ、ヤウなり。猿サルの劍術ケン、ジュツハ牛馬問ウシ、ウマ、ト四卷シ、クワン 五丁、ヨ、柳
 生但州ナマ、ヂウ猿サル字二足飼フタ、タラシ、ケ終ハシひ、常々ツネ、ツネ打太刀ウチ、タチにヒく、劍術
 一終イツ、シウひハシふ、此猿コノ、サルとモ至極業シ、コク、ゴウの通トじク、初心シニ、シンの弟
 子衆シヨウと、いつイツそ、此猿コノ、サルは負マカしタとモなり。爰コノは或浪人シ、ナミ、ジン、鎧
 字自慢ジ、マンとモ、何ナニとモ、但州ヂウふ出合度デ、アヒ、タと思オモひ、縁縁字求マシ
 て至マシて、對面テイ、メンの後ノチとモ、私儀シ、ギ少々シヤウ、シヤウ鎧ケを心掛候ココロ、カケ、コウ、乍シラ憚ハヤシ

御覽被下ミ、ラン、ヘ、シ、タとモ、但州ヂウ間終マ、ハシひ、安ヤス事コトちシらシ、先マシ此猿
 立合タチ、アヒみマシらシれシとモ、召メカ時トキ、件ケンの浪ナミ又マタ大オホふ腹ハラあハは顔
 色イロふシて、是コノはあハまハうハなるコト事コトと申マシふ、尤モトなハれシ、先マシ
 立合タチ、アヒみマシらシれシとモ、召メカ、是非シ、ヘなく、竹刀タケ、タチ字持ジ、テかシけシ、
 猿サルハ竹具タケ、グ足タラシふ面オモうハけ、小志コ、シなハしテ持テて、互タガに立
 合アヒ、カヒ彼カノの只タガ一突イツ、ツキは突倒ツキ、タタとモ、擲マシとモ、猿サルは
 ぐと拙シラて、何ナニの造作ゾウ、サツとモ、件ケンの男オトコを打ウチたシ、業ゴウ

相違し。今一度と望けとバ。又一疋の猿字出さる
ふ。立合又此猿字たるれ。大ふ面目を失ひ歸る
る。それより四五十日ほどハ。夜を以て日は精
心より工夫を盡し。又柳生のともよ。一級。對面の上。扱
件の様と立合申度と望くれ。但州閑給ひ。見申
ふ。其方工夫先日より殊外上達也。今度ハ猿字
中々勝事成る。夫と立合見られ候。一や。猿

を出せ。互に相向ひ。いふ。鑓字出さる。猿大
ふ啼て逃しと也。件ハ男リ但州の門弟と成り。奥
義を傳ふるといふ。因に云。擊劍の二字。劍
術ハ事と心得たるものあるは。漢書。東
方朔傳。注。小師古曰。擊劍。遙擊而中之。非。斬刺也。と
いふ。劍を飛さる。五代史。六十一卷。吳世家。論贊
に。洪拔劍擊行密。不中。とあり。張洪が劍を飛し。

楊行密字擊人とせし也也。擊ハ擊中ノ義と知下。
 六代字面。史記司馬相如傳上。漢書司馬相如傳上。
 同尹翁歸傳。唐書二百二卷文。李白傳カド其外所
 見おひる。

松屋外集卷之二終

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 松屋外集 and 卷之二）

